長沢美津の短歌

山本陽子

短歌新聞社

長沢美津の短歌

山本陽子

短歌新聞社

著者の略歴

昭和9年福岡に生まれる。
昭和27年香椎県立高校卒業。
昭和49年女人短歌に再入会。
昭和57年氷原入会。現在同人。
歌集に『石笛』がある。
日本歌人クラブ会員。

現住所 〒812 福岡市東区箱崎3-27-10
TEL(092)651-1709

長沢美津の短歌

昭和63年9月9日発行

著者 山本陽子
発行者 石黒清介
印刷所 有限会社ニツカ
発行所 短歌新聞社

〒166東京都杉並区高円寺南4—43—9
振替口座 東京 5—21683
TEL (03) 312—9185

1092—000529—4362 定価2500円

長沢美津の短歌

目　次

はじめに……七

第一期　青垣時代

『氾青』……二

『垂氷影』……三

『花芯』……四七

第二期　戦後女人短歌結成後

『雲を呼ぶ』……六一

『水面』……七八

『雪』……八八

『汐』……一〇一

『車』……一二五

第三期　女人和歌大系編纂後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『往来』……一三
『地紋』……一四六
『線』……一六〇
『五黄』……一七五
『層塔』……一八八

第四期　個性達成期

『墨雫』……二〇五
『天上風』……二一九
『八十扉』……二三八
『青海波』……二五三
長沢美津年譜……二六五
跋……石本隆一……二七七
あとがき……二八三

長沢美津の短歌

はじめに

「長沢短歌」に出逢ってから十数年が過ぎた。私の第一印象を振り返って見ると、長沢美津は、直感的に受けとめた素材の本質的なものを大切に詠んでいると思った。だが、歌は上手だとは思わなかった。しゃれた詠みぶりではなかったし、人目を引くようなきらびやかさはなかった。むしろ、ぶっきら棒で無愛想な感じの歌が多く、おまけに定型形式を破った自由律的発想の歌が歌集の中で飛び跳ねている。私はとまどいを感じた。

短歌の伝統や韻律を充分に知りつくした、女人和歌研究家の長沢から生まれる破調短歌は、何を意味するのであろうか。見ていると実にさまざまな味があり、面白さがあり、安らぎがある。長沢短歌に感じる安らぎとは、題材のまじめさ、作家意識のまじめさ等からくるのかも知れない。言って見れば、それはまやかしのない歌だという安心感、つまり今風にいえば無農薬短歌だと言うことができる。

明治に生まれ、大正のリベラリズムの中で育ち、女人短歌会の中心的存在として激動の昭和を生き続ける長沢の歌は、女人短歌発展の原動力として前進を続けている。戦後からを現代短歌と

して見るとき、長沢短歌をぬきにして考えることは出来ない。

女人短歌会が四十年の歩みを続けてきたのは、女流歌人達の努力があったことは当然として、何よりも重要なことは、敗戦がもたらした新しい女性の歌の機運であり、それとひびきあった女性の知的短歌と情熱である。

女人短歌会の創設者の一人である北見志保子の作、平井康三郎氏作曲の「平城山」は、新旧を越えた叙情の歌であり、戦後のすさんだ人々の心をうるおし今なお歌い継がれている。だが、叙情の歌だけに安住していたら現在のような発展はなかったに違いない。

戦後の第二芸術論のきびしい批判にさらされながら、宮柊二、近藤芳美、大野誠夫などが示した新しい叙情の男性短歌に、女性が加えたものを認識するためにも、長沢短歌の時代的検証の必要性が感じられる。

折口信夫の「女流の歌を閉塞したもの」は、アララギの歌風とは異質の、理知的な歌、主情的な作風の歌が、女性の歌本来の流れの伝統の中に新しくよみがえってこようとしているのを感じて書かれたものである。折口が予言したように、結社を超えた女性歌人たちによる大きな波のうねりは伝統をよみがえらせ与謝野晶子を最後として衰えていた女性の歌を復活させていった。

長沢美津と短歌のつながりは、石川県立第一高等女学校在学中の二年間（大正九年四月から十一年三月まで）、歌道講師の江戸さい子により、一般教養としての作歌指導を受けたことにはじまる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一高女の和歌は正課ではなかったが、兼題により全員が提出し、週一回講堂で江戸さい子の批評を受け、作品の被講が行われた。この江戸さい子は堺市生まれ、与謝野晶子と同窓、大口鯛二に師事のち歌道奨励会の支部長として金沢に在住、ひとすじの和歌道をまもった。

大正十一年、日本女子大学国文科に入学。当時、選択科目に「作歌」というのがあり講師は茅野雅子であったが、この科目は選ばず、別に短歌グループをつくって自由に作歌を続けたという。また卒業論文を書かずに短歌を提出したというエピソードが残っている。

長沢は在学中、武島羽衣の教課を受け、古典の中の短歌に対する解釈は一通り学んだが、興味は現代文学に移り「目白文学」の創刊に参画した。仲間には優れた人達が多かった。その一人、苅田あさのは卒業後早稲田大学のロシヤ語科に進み、帰国後共産党女性最初の代議士として活躍する。民主新聞主筆の水沢ヤナ子も同期であり、当時の思想関係の渦中にあった。

長沢は短歌グループに属していたため厳しい弾圧を免れることが出来た。この時代の左翼活動は、現今のプロレタリヤ活動と異なり、当時のインテリゲンチャー達は、その運動に心を魅かれたのである。長沢の「学生時代に求めた短歌、そして卒業後間もない結婚、出産、育児の生活環境がなかったならば、私も左翼運動に走っていたかも知れない」と言う回想を聞くとき、長沢の短歌との出逢いの意味は大きい。

卒業に先立ち、日本女子大国文科の教授であった久松潜一の紹介により、古泉千樫の門に入り、

以後千樫亡きあとも他に師を求めることはなかった。

長沢短歌の特長のひとつに、破調の歌がある。その誕生をうながしたものとして、長沢の日本女子大在学中の大正十三年四月に創刊された超結社誌「日光」がある。結社の閉鎖性を打ち破り、自由精神の歌風を求める「日光」は、アンチ・アララギ的存在の集団であり、北原白秋、土岐善麿、古泉千樫、木下利玄、川田純、前田夕暮、釈迢空、矢代東村ら三十名が参加している。そして長沢は、いち早く創刊号の「日光」を手にしている。大学近くの武蔵野書院の主人が届けてくれたのである。学生時代、結社に属していなかった長沢の目に写った印象は一過性のものではなかったらしく、長沢短歌の方向づけともなったと思われる。ちなみに武蔵野書院の主人が、卒業後に出版した処女歌集『氾青』の販売をひきうけたのであった。売りあげ代金の一部精算がまだ残っているとの一枚のハガキが現在も存在している。

長沢短歌は最初に旧派というべき江戸さい子に出発し、自ら選んだ目白の国文科ではその系統を振り切っている。自覚的に次第に移行した自由なリズムの発想が見られ、現在につづいている。在学中に触れた新出発の「日光」に見出したものは何であったのか。おそらく久松潜一教授が古泉千樫に紹介したのも千樫の経路とその歌風傾向を考慮してのことであったのであろう。

「日光」において試行された口語自由律短歌は、斎藤茂吉や土屋文明にも或る程度の影響を与えた。大正末から昭和十年頃にかけて、さまざまに試行され、男性歌人達によって活発化した自

由律化への動きも、日華事変を迎える頃より次第にその影を薄くしていった。このような動揺の中でも、長沢の自由を求めるリズム表現は着実に生き続け、みがかれてゆき、現在もその尾を曳いている。

柿栗熟れし木の実をたうべたうべおのづからたもつなごみの心　『氾青』
いないな赤にはあらず汝が指せるは朱のいろふかき貝細工の花　『垂氷影』
三人の子歩みてゆくを遠みれば大きなるも小さし小さきは更に小さく　『往来』
朝に夕に経を続むわれとわが心のうちの芯の危ふさ　『線』
われもやがて逝くなりそれまでのいまより開くる新しき道　『墨雫』
夢のなかにてもわれはよく旅をする醒めたるときにあたり見廻す　『八十扉』

五七五七七をはみ出した独自の詠風の歌を抄出したが、十七歌集全体を見ると、多くの歌は定型形式の中に納まっている。

長沢短歌の自由律を考えるとき、注意しなければいけないことは、第六歌集『雪』から『汐』『車』に編まれている歌の「レニヤ登山」まで定型で詠まれていることである。『雪』は、昭和二十九年二月一日、雪の中で自らの命を絶った三男弘夫への挽歌であり、『汐』は傷心を抱いた長

沢の内地遍歴の歌である。内地ではついに求めるものに出逢うことがなかったかのように、長沢は独りアメリカへと旅立って行った。『車』は世界巡礼の歌である。

『車』

身じろがず立ちゐるわれの体ごと支へてレニヤの雪の真白さ
ずり落つる氷河の動きにたちすくみつかの間われの命は沈む
雪の縞とも見ゆる底のなき裂け目を持ちて氷河は動く
レニヤまで来てしまひたるさまよひに心はなほも遠くさまよふ
幾億年山肌にぶく陽をかへす氷河のうへにひろぐるまぼろし

『雪』『汐』『車』の三部作は、挽歌調の自然発生の歌である。

長沢がレニヤの雪の中に佇ったとき、まるで禊を受けたかのように、精神的巡礼の旅は終った。そして、呪縛から逃れることが出来た長沢は、自分の歌、つまり長沢短歌の発想を深かめたのである。

『雪』は評判がよく版を重ね、賞も受けた。ある日、「『雪』は評判がいいですね」と、言ったところ、「あれは生まれた歌、芸術は生み出すもの」と言う声が、即座にはね返って来た。

歌風についていえば、大正十四年から昭和六十二年迄の長沢短歌を、青垣時代、戦後女人短歌

結成後、女人和歌大系編纂後、個性達成期の四期に大別できる。この後、熟成期がひかえているが、如何に熟成したかは、あるいは生が終ってから見るべきことかも知れない。その到達点については未知数である。

まんまんの川水はだらにかがやきてわがさみしさのきはまりゆかず　『氾青』
空すめば心むなしく野に出でて過ぎこしかたのわれをいとしむ
この国の秋づく日に来て生れたる汝がまなざしのすめるかなしさ
頬の肉(し)強くゆりつつ汝が呑むは今わが身ぬちになりし新母乳(あらちち)
李の花近より見れば真つ白し遠見は淡き青さをおぼゆ　『垂氷影』
梨の花遠見もちかくも真白なり蕋の目にたつは梨の花
ひといろに落葉樹林しみ立ちて木つつきわたる高き梢を　『花芯』
湍つ水凍りてかかる滝白し岩間に凍みたる水の量感

長沢短歌を鑑賞するとき、第一歌集から第三歌集までの『氾青』（大正十四～昭和四年）、『垂氷影』（昭和四年～十年）、『花芯』（昭和十年～十五年）の作品をいわゆる青垣時代として特徴づけるならば、この時代の作品は、ひたすら写生を基調とし、核心をつかもうとする目は透明で明るい。

学生時代、結婚、育児を通じ大きく変る時代の流れの中で、作品は真摯に生きる長沢の姿に貫かれている。的確な表現をのぞむ鋭い感受性が、時折、破調となり個性的な歌を生む。師古泉千樫の歌風を受けながら、周囲の理解と暖かさの中に歌は休むことなく詠み続けられている。

じらじらと硫黄マッチがくすぶりて炎たつるまでにやや間があり　『雲を呼ぶ』

他を律する程に自らにきびしくありたきそこよりひらけむ

救ひがたく救はれがたきはそのままに空よりひろがる夕暮の鐘　『水面』

これでよしといふことはなしわが影も風に揺れゐる水のおもてに

踏みこえてふたたびかへらぬわかれ目にうづめつくして白き雪道　『雪』

からつぽになりたる胸のくぼみのなかにしたたりおつる春雨のおと

猟銃の禁止区域を舟はゆく潮はふくらみ波はかさなる　『汐』

手を高く振りあふわが影をひらひらと砕く川の水

しらざるはしらざるままに一人旅ニューヨーク国際空港のあけがた　『車』

サブウエー出口に渦巻く風塵白し曲り角に立つわれは旅人

『雲を呼ぶ』（昭和十六年～二十五年）『水面』（昭和二十五～二十八年）『雪』（昭和二十九年）『汐』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com